岐阜経済大学論集 34 巻 2 号（2000 年）

「資本主義」語なきマルクス

――「資本主義」語のはじまり（4）――

重　田　澄　男

I. マルクスにおける資本主義用語
II. 「資本主義」語の使用例
1. 未定稿の原稿やノート類
2. 手紙，その他
3. エンゲルスの使用例
4. 小　括
III. わが国の論者による指摘
（1） 福田徳三「資本増殖の理法と資本主義の崩壊」（1921 年）
（2） 我妻栄「資本主義生産組織における所有権の作用」（1927 年）
（3） 平瀬巳之吉『古典経済学の解体と発展』（1950 年）
（4） 大塚久雄『欧洲経済史』（1956 年）
（5） 高島善哉『アダム・スミス』（1968 年）
（6） 望月清司『マルクス歴史理論の研究』（1973 年）
（7） 馬場啓之助『資本主義の逆説』（1974 年）
（8） 小　括

I. マルクスにおける資本主義用語

「資本主義」（Kapitalismus）という用語の起源と普及について詳しい考証をおこなっているリヒァルト・パッソウの『資本主義――概念的・術語的研究――』は，マルクスが使っている資本主義についての用語は「資本家的生産様式」

(kapitalistische Produktionsweise) であって「資本主義」(Kapitalismus) ではなかったと，次のように指摘している。

「わたしのみたかぎりでは，マルクスは資本主義についてはどこにおいても述べていない。彼はむしろ「資本家的生産様式」という表現を，時によっては他の似たような合成語を使っている。それにもかかわらず，最近(1914 年) 出版された『資本論』普及版の第 1 版の事項索引のなかには，奇妙なことに資本主義という見出し語が，ページの指示とともに見いだされる。しかし，実際にはそこにはそのような表現はまったく見いだせない。」[1)]

パッソウが指摘していることは，『資本論』そのものにおいては明確な事実である。

『資本論』第 1 巻の冒頭の文章は，「資本家的生産様式が支配している諸社会の富は，「商品の巨大な集まり」として現われ，個々の商品はその富の要素形態として現われる」[2)] となっていて，まさしく「資本家的生産様式」が支配している社会の富という叙述となっている。それは，けっして「資本主義における富」でもなければ，「資本主義社会の富」という表現でもない。

そして，『資本論』第 1 巻の締めくくり的部分である第 7 篇第 24 章の第 7 節「資本家的蓄積の歴史的傾向」においては，近代社会の歴史的位置とその変革の基盤の形成について，「資本家的生産様式から生まれる資本家的領有様式は，それゆえ資本家的な私的所有は，自分の労働にもとづく個人的な私的所有の最初の否定である。しかし，資本家的生産は，自然過程の必然性をもってそれ自身の否定を生みだす。これは否定の否定である。この否定は，私的所有を再建するわけではないが，しかし，資本家的時代の成果――すなわち，協業と，土地の共有ならびに労働そのものによって生産された生産手段の共有――を基礎とする個人的所有を再建する」[3)] と，「資本家的生産様

式」概念を基礎として把握しているのである。

さらに，『資本論』全3巻の最終章たる第3巻第7篇の第52章「諸階級」においては，「労賃，利潤，および地代を各自の所得源泉とする，たんなる労働力の所有者，資本の所有者，および土地の所有者，すなわち賃労働者，資本家，および土地所有者は，資本家的生産様式にもとづく近代社会の三大階級を形成する」[4]といったかたちで，近代社会の三大階級を「資本家的生産様式」のうえに形成されるものと把握し，それでもって『資本論』を完結するものとしているのである。

このように，『資本論』における近代社会の経済分析にとっては，「資本家的生産様式」という概念と用語こそが基軸的で規定的要因をなすカテゴリーとなっていて，「資本家的生産様式」という用語は『資本論』第1巻で63回，その全3巻においては289回も使われている。

そのように，『資本論』における「資本家的生産様式」という用語と概念は，マルクスの近代社会の経済構造の把握にとって不可欠なカテゴリーとなっているのであるが，それにたいして，「資本主義 Kapitalismus」という用語は，マルクスが生存中に公刊した著書・論文についてみるかぎりまったく使われていない。

だが，だからといって，マルクスは「資本主義」という用語をまったく使ったことがない，というわけではない。未定稿の原稿やノートへの書き込み，あるいは手紙等には，わずかながら「資本主義」という用語表現が見いだされる。

そこで，本稿では，まず，稀少ながらも存在するマルクスにおける「資本主義」という用語の使用例について点検する。そのうえで，パッソウが指摘しているように，マルクスには基本的に「資本主義」という用語が使用されていないという事実についてのわが国の論者による論及について，みていくこととしたい。

なお，「資本家的生産様式」という用語と「資本主義」という用語との規

定的意味内容についての異同と，マルクスによる「資本家的生産様式」という用語使用の経緯と意義については，次稿において点検することとしたい。

II.「資本主義」語の使用例

メグナド・デサイは，『マルクス主義思想辞典』の「資本主義」項目において，「彼〔マルクス〕は，1877年に，ロシアの仲間との手紙において，ロシアの資本主義への移行の問題についての議論のなかでそれ〔名詞としての「資本主義」という言葉〕を使っている」[5]と指摘しているが，マルクスによる「資本主義」語の使用例はそれだけではない。

マルクスとエンゲルスにおける「資本主義」という用語の使用例については，望月清司氏が『マルクス歴史理論の研究』のなかでかなり詳しく明らかにされているが[6]，しかし若干の遺漏や新 *MEGA* による追加あるいは思い違い[7]がふくまれているので，それらを補ってみてみるならば次のごとくである。

1. 未定稿の原稿やノート類

マルクスの未定稿の原稿やノート類に見いだされる「資本主義」語は3個所にある。

① 『1861–63年の経済学草稿』

その1つは，『1861–63年の経済学草稿』の『ノート』VIII, S.704におけるものであるが[8]，それについてのマルクスによる執筆状況として，その見開きページに原稿の写真版が載っている。

それは，図1にみられるように，難解なドイツ文字の筆記体で，英独まじ

図 1.『1861–63 年の経済学草稿』における「資本主義」

größte Theil der Bevölkerung, die Arbeiterbevölkerung, nur innerhalb sehr enger Grenzen ihre Consumtion erweitern kann, anderseits, im selben Maasse wie der Capitalismus sich entwickelt, die Nachfrage nach Arbeit *relativ* abnimmt, obgleich sie *absolut* wächst. Es kömmt hinzu,

新 *MEGA*, II-3.3, S. 1114, 1115.

りのスペルが，しかも，悪筆で有名なマルクス独特の筆跡での走り書き的な省略形でもって書かれている。

そこで「資本主義」という言葉が書かれているとされているものは，ローマ字に直すと "d. Capit." と書かれているように読めるものであって，これを *MEW*（*MEGA*）編集者が "der Capitalismus" と解読したものである[9)]。

このマルクスの走り書き的ドイツ文字を "d. Capit." と読み，さらに，この近くには Capitalien や Capitalist などといった言葉も使われているのに，この "d. Capit." と読んだ省略語をさらに "der Capitalismus" と判読するという解読能力には，まったく驚かざるをえない。

なお，この草稿は，1861–63 年に書かれた『経済学草稿』のなかの『剰余価値学説史』部分にあたるものであって，すでに以前の『マルクス＝エンゲルス全集』にも載っているものである[10)]。

この「資本主義」用語は，次のような文脈のなかで使われている。

「人口の最大の部分すなわち労働者人口がその消費を拡大しうるのは，非常に狭い限界のなかに限られているのに，他方，資本主義（Capitalismus）が発展するのと同じ程度で，労働にたいする需要は，たとえ絶対的には増大するにしても，相対的には減少する……。」[11)]

このように，ここで使われている「資本主義 Capitalismus」という用語は，マルクスがこの時期に使っている「資本家的生産 kapitalistische Produktion」あるいは「資本家的生産様式 kapitalistische Produktionsweise」と置き換えてもそのまま通用するかたちで使われているものである。

しかも，それは，最初の『資本論草稿』としての膨大な下書き原稿のなかで，急ピッチで大量の内容を走り書き的に筆をすすめているときに書いているものであり，しかも，さらに省略形をとった用語として書かれているものである。

② 『資本論』第 2 巻の初稿の原稿

2 つめは，『1861–63 年の経済学草稿』の完了後に『資本論』全体の完成稿の作成のために取り組まれた『1863–67 年の経済学草稿』のなかの『資本論』第 2 巻の初稿の原稿中におけるものであるが[12]，これまた新 *MEGA* に写真版が載っている[13]。

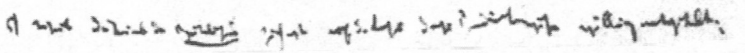
だが，ここでのマルクスの原稿もまた，図 2 にみられるように，ドイツ文字の筆記体の省略形で書かれていて，ローマ字では “d. Cpitlsms” とでも読めるように思われるものであるが，それを *MEGA* 編集部が “der Capitalismus” と解読したものである。

この「資本主義」という言葉の出てくる文章は，『資本論』第 2 巻「資本の流通過程」の初稿の草稿のなかの第 3 章第 5 節「蓄積あるいはより大きな規模での再生産」のなかに出てくる次のような文章である。

「5） なぜならば，資本主義（Capitalismus）の推進力そのものは，なによりもこの生産様式の基礎上で完全に発展するものであるからである」[14]

そこで取りあげられているのは，資本蓄積による拡大再生産は，単純再生産に比して「人口の自然的増加」と「余剰資金の形成」を内的なモメントと

図 2.『資本論』第 2 巻初稿（『1863–67 年の経済学草稿』）における「資本主義」



5) weil der Trieb des *Capitalismus* sich erst auf der Basis dieser Productionsweise völlig entwickelt;

新 *MEGA*, II-4.1, S. 358, 361.

した過剰生産においておしすすめられるものであるが，しかし，このような過剰生産は，以前の生産様式においては，資本家的生産様式の基礎上でのその大きさに比して取るに足りない大きさであるということの理由を，6 点にわたって述べているものである。

そこでは，以前の生産様式においては，財産形成は生産拡大の部分的な目的にすぎず，剰余労働や剰余生産物の大部分は非生産的な国家的あるいは宗教的な人々によって消費されたのにたいして，資本家的生産様式においては，人口や労働者の不比例的増加や，あるいは生産の絶えざる変革や世界市場との関連のなかで，不断の生産拡張をおこなうことが必要になるものであることを指摘する文中において，第 5 点として資本家的生産様式の発展の内的推進力について述べるくだりで，「資本主義」という言葉が使われているのである。

これまた，図 1 にみられるように，走り書き的に書かれている原稿のなかで使われている省略語に他ならない。

③ 現行『資本論』第 2 巻

3 つめは，現行『資本論』において「資本主義 Kapitalismus」という言葉が使われている唯一の例であるが，これはマルクスの死後，エンゲルスが遺稿やメモ，ノートなどを利用しながら『資本論』の第 2 巻を編集したときに，「1877 年または 1878 年の 1 冊のなかで諸書の抜粋のあいだに見いだされる覚え書き」[15]であり「抜き書き帳のなかにあった注」[16]からとった文章

であって，それが現行『資本論』の第2巻のなかに組み入れられているものである。

この「資本主義」語については，その草稿を直接にみられた大村泉氏が，マルクスがドイツ語で書いたものであることを確認されたとのことである。

それは，『資本論』第2巻第1篇「資本の諸姿態とその循環」のなかの第4章「循環過程の3つの図式」のなかでの叙述におけるものであって，再生産の考察がおこなわれるなかで，資本家が生産物総額（c＋v＋m）のうちの剰余価値（g）全部を個人消費するという場合を考察したうえで，述べられている叙述である。

「この前提は，資本家的生産が存在しないという，したがって産業資本家そのものが存在しないという前提と同じである。なぜならば，致富そのものがでなく享楽が推進的動機として働くという前提によっては，資本主義(Kapitalismus) はすでにその基礎において廃止されているからである。／しかし，この前提は技術的にも不可能である。資本家は，価格の変動にそなえて，また売買のためにもっとも有利な市況を待つことができるようにするために，準備資本を設けなければならないが，それだけではない。彼は，生産を拡張し技術進歩を彼の生産有機体に合体するために，資本を蓄積しなければならない。」[17)]

ここで述べられていることは，剰余価値（g）をすべて個人消費にふりむけて資本蓄積はまったくおこなわないという事態は資本家的生産においてはありえないことであるということであるが，そのように消費による個人的享楽が生産の推進的動機となるという事態は「資本家的生産」が存在しないということを意味するし，そのことは「資本主義」がその基礎において廃止されていることを意味するというかたちで，ここでの「資本主義」は「資本家的生産」に基礎づけられた「資本家的生産様式」と同じ意味あいにおいて使

われている。

ともあれ，これまでみた3つの事例は，いずれもマルクスが1861年以後に『資本論』の原稿の下書きを急ピッチで書きこんだり，あるいは，その第2巻の仕上げにあたっての抜き書きのなかで記入したりした文章のなかに見いだされるものである。

2. 手紙，その他

これまでみてきた未定稿の草稿やノート類は別として，マルクスによる手紙類のなかでの「資本主義」という言葉の使用についてみると，その多くは英語かフランス語である。だが，ドイツ語で「資本主義」という言葉が使われているケースが2件ある。ただし，2件ともシェフレの書名を指したものである。

① 「エンゲルス宛ての手紙」（1870年9月14日付け）

マルクスは，1870年9月14日付けの「エンゲルス宛ての手紙」の追伸部分に，「シェフレの本の題名は『資本主義と社会主義うんぬん』（„Kapitalismus und Socialismus etc.“）というのだ」と，ドイツ語で書いている。

ここで問題にされているのはA. E. F. Schäffle, *Kapitalismus und Socialismus mit besonderer Rücksicht auf Geschäfts- und Vermögensformen: Vorträge zur Versöhnung der Gegensäze von Lohnarbeit und Kapital*, Tübingen, 1870.（シェフレ『営業的および資産的形態にとくに顧慮しての資本主義と社会主義：賃労働と資本との対立の融和のための講義』チュービンゲン，1870年）[18]のことである。

この本については，別の機会にあらためて詳しく取りあげる予定であるが，シェフレは現在ではほとんど知られていない存在なので，ここで簡単に紹介しておくことにする。

シェフレ（Albert Eberhard Friedrich Schäffle, 1831–1903）は，ドイツの社会学者，

財政学者，経済学者であって，チュービンゲン大学においてはじめ神学を学んだが，のちに経済学に転じ，チュービンゲン大学，ウイーン大学教授を歴任し，1871年にはオーストリアのホーエンワルト内閣で商相をつとめた人物である。社会学の分野では社会有機体説の立場に立ち，経済学の分野では新歴史学派に属し，改良資本主義を理想とし協同組合主義を主張した，といわれている。

このシェフレが，マルクスが『資本論』第1巻を出版した1867年の3年後の1870年に，この『営業的および資産的形態にとくに顧慮しての資本主義と社会主義：賃労働と資本との対立の融和のための講義』という長い書名の732ページもの大部の本を出し，そのなかでマルクスの『資本論』について取りあげているので，それが問題にされているのである。

そのあたりのことをマルクスとエンゲルスとの手紙のやりとりのなかでみてみると，1870年9月10日付けのマルクスからエンゲルス宛ての手紙のなかで，追伸として，「ついでだが！ チュービンゲンのシェフレ教授が僕に反対してばかげた厚い本（値段は12シリング半！）を著わした」[19]と書いており，折り返しエンゲルスからマルクス宛てに，「シェフレの本の題名はなんというのか，たぶん君は知らせてくれることができるだろう。そこには君のほんとうの敵があるのだ。この男は関税議会のなかにいた。そして一個のまったく平凡な俗流経済学者で，すでにより多くファウアー（Faucher，唸りまくる人）なのだが，しかしシュヴァーベン人なのだ。その本では君は喜びを味わうことだろう」[20]と返事をしている。

そして，さらにそれにたいするマルクスからエンゲルスに宛てた手紙が，先にみた「シェフレの本の題名は『資本主義と社会主義うんぬん』（„Kapitalismus und Socialismus etc.“）というのだ」というものである。

② 「アードルフ・ヴァーグナー著『経済学教科書』への傍注」

ところで，マルクスは，それから10年ほど後の1879年後半から1880年

11月までの時期に「アードルフ・ヴァーグナー著『経済学教科書』への傍注」を書いている。この「傍注」のなかで，マルクスは，『資本論』で展開した価値学説にたいするヴァーグナーによる歪曲を批判しながら自分の学説の基本命題を説明しているのであるが，そのさい，ヴァーグナーがしきりにシェフレを引き合いに出していることに触れている。

そして，ヴァーグナーの見解を批判するなかで，シェフレを引き合いに出しながら，次のように述べている。

「私はたとえば労働力の価値の規定にあたっては，その価値が現実に支払われるということから出発しているが，これは実際にはそうでないのだ。シェフレ氏は『資本主義』うんぬん（„Kapitalismus“ etc.）のなかで，この点をとらえて「気まえがいい」とか，それに類することをいっている。彼がここであてこすっているのは，科学的に必要な手続きにすぎないのだ。」[21)]

このようなシェフレの『資本主義と社会主義……』についてエンゲルスとやりとりした手紙やノートに記した「傍注」からみると，マルクスは1870年にシェフレのこの本を入手し，そのうえで，この本に書かれているシェフレの見解の内容についてかなりきちんと把握しているもののようである。

このことは，なにを意味するか。

シェフレの本の表題そのものが『資本主義と社会主義……』というものであって，「資本主義 Kapitalismus」という言葉が使われており，さらに，シェフレの本のなかにはふんだんに「資本主義 Kapitalismus」という用語が使用されているのであるからして，マルクスは「資本主義」という用語についてはうんざりするほど目にしたことは確かである。

しかし，マルクスは動じていない。マルクスは，「資本主義」という用語にたいして，それが「資本家的生産様式」に代わる有用な言葉としての意義をもったものとしては考えなかったようである。彼は，相変わらず「資本家

的生産」「資本家的生産様式」という用語を使いながら，1872年7月から1873年4月にかけてドイツ語版『資本論』第1巻についての第2版を9分冊に分けて刊行し，さまざまの重要な修正をおこなったフランス語版の校閲をおこなって1872年8月から1875年5月にかけてフランス語版『資本論』を分冊で刊行し，1877年からドイツ語版『資本論』の第2巻の原稿の執筆に取り組んでいる。

そして，1870年代におけるこのような取り組みにおいても，マルクスはあくまで「資本家的生産」「資本家的生産様式」を基軸的カテゴリーとして叙述をおこなっており，「資本主義」という新しい用語の採用をおこなってはいない。

③『オテーチェストヴェンヌイエ・ザピスキ（祖国雑記）』誌編集部に宛てた手紙（1877年11月頃）

マルクスは，1877年11月頃『オテーチェストヴェンヌイエ・ザピスキ（祖国雑記）』誌編集部に宛てたフランス語の手紙を書き（発送せず），同誌の同年10月号に載ったミハイロフスキーの「ジュコーフスキー氏に裁かれたカール・マルクス」なる論説への批判をおこなっているが，そのなかで「資本主義」という言葉を使っている。

「〔『資本論』の〕本源的蓄積にかんする章は，西ヨーロッパにおいて資本家的経済秩序（kapitalistische Wirtschaftsordnung）が封建的経済秩序の胎内から生まれでてきたその道をあとづけようとするだけのものであります。……

ところで，わが批判家〔ミハイロフスキー〕は，この歴史的な素描をロシアにたいしてどのように適用することができたでしょうか？ ただ次のようにです。もしロシアが西ヨーロッパ諸国民になることをめざすならば，ロシアは，あらかじめ農民の大部分をプロレタリアに転化することなしには，それに成功しないであろうし，ついで資本家的経済（kapitalistischen Wirtschaft）

のふところにひとたび引きこまれるや，他の諸民族と同様に資本家的制度（diese System）の無慈悲な諸法則に服従させられるであろう，ということ，ただこれだけであります。しかし，これでは，わが批判家にとっては足りないのです。西ヨーロッパでの資本主義（Kapitalismus）の創生にかんする私の歴史的素描を，社会的労働の生産力の最大の飛躍によって人間のもっとも全面的な発展を確保するような経済的構成に最後に到達するために，あらゆる民族が，いかなる歴史的状況のもとにおかれていようとも，不可避的に通らなければならない普遍的発展過程の歴史哲学的理論に転化することが，彼には絶対に必要なのです。しかし，そんなことは願い下げにしたいものです。」[22)]

なお，この手紙はフランス語で書かれているものであるが，*MEW* はすべてドイツ語に翻訳してあるので，文中の単語の原語もドイツ語で示されている。この点は，この後の手紙類の場合も同様である。したがって，これらフランス語や英語での手紙の場合に原文において「資本主義」という用語が使われているかどうかについては，後述の「ヴェラ・ザスーリチ宛ての手紙」の〈第1草稿〉のようなケースもあるので，やや不確かである。

なお，ここでの「資本主義」という用語も，文中にある「資本家的経済秩序」や「資本家的経済」あるいは「資本家的制度」といった用語と同じような意味内容におけるものとして使われており，とくに独自的な特別の意義をもったものとしては使われていない。

④ 「ダニエリソーン宛ての手紙」（1879年4月10日付け）

1879年4月10日付けにおいて，マルクスは，ロシアのナロードニキの理論家であり『資本論』のロシア語版の翻訳者であるダニエリソーン宛てに英語で手紙を書いているが，そのなかに次のような文章がある。

「主要な資本主義諸国（führende Länder des Kapitalismus）における鉄道網の出現は，資本主義（Kapitalismus）がまだ社会のわずかばかりの点に局限されていた諸国が，今や最短期間でその資本家的上部構造（kapitalistische Überbau）を作りだして，それを，生産の主要部分を伝統的な諸形態で営んでいる主要な社会部分とはまったく不釣合いな大きさにまで拡大したということを，ただ可能にしただけではなく，必然性をもって強制さえもしました。だからこれらの諸国では，鉄道の建設が社会的および政治的分解を促進させたし，先進諸国では鉄道の建設が資本家的生産（kapitalistische Produktion）の決定的な発展を速め，したがってまたその最終的な変化を速めたということは，すこしも疑いありません。」[23)]

⑤ 「ヴェラ・ザスーリチ宛ての手紙」〈第１草稿〉（1881 年 2 月末から 3 月初め）

さらに，マルクスは，1881 年 2 月末から 3 月初めにかけて，フランス語で，ロシアの女性革命家ではじめはナロードニキに加わり後に社会民主主義運動に参加してマルクス主義的な労働解放団の創立に取り組んだヴェラ・ザスーリチ宛てに手紙を書いているが，*MEW* のドイツ語版では，その〈第 1 草稿〉と〈第 2 草稿〉に「資本主義」という言葉が使われている。

この手紙は，ザスーリチがロシアの歴史的発展における村落共同体の運命にかんして，ロシアのマルクス主義者たちが主張していた「世界のすべての国々が資本家的生産のすべての段階を経過することが歴史的に必然的である」という見解にたいして，マルクスに意見を聞きたいという手紙にたいする返事として書かれたものである。

マルクスはこの返事を書くにあたってはきわめて慎重であって，まず下書きを，それも 4 回も下書き草稿を書いており，そのうえで返事を出したようである。

その〈第 1 草稿〉のなかでは次のような指摘がおこなわれている。

「「農村共同体」のこういう発展が現代の歴史的潮流に照応するものであることの最良の証拠は，資本家的生産が最大の飛躍をとげているヨーロッパとアメリカの諸国においてこの生産がおちいっている宿命的な危機である。この危機は，資本家的生産（Kapitalismus, la production capitaliste）が消滅することによって，〔すなわち〕近代社会がもっとも原古的な型のより高次な形態たる集団的な生産と領有へと復帰することによって，終結するであろう。」[24)]

この文章における「資本家的生産」は，*MEW*（『マルクス＝エンゲルス全集』原本）では“mit der Abschaffung des Kapitalismus”（資本主義の消滅にともなって）と「資本主義 Kapitalismus」という用語を使った叙述になっている。

だが，1928 年にリアザノフが編集した『マルクス＝エンゲルス・アルヒーフ』（*Marx-Engels Archiv*）第 1 巻所収のフランス語の原文においては“la production capitaliste”（資本家的生産）となっており[25)]，平田清明氏が『アルヒーフ』のフランス語原文から訳された『マルエン全集』においても「資本主義的生産が消滅することによって」となっている。

⑥ 「ザスーリチの手紙への回答の下書き」〈第 2 草稿〉

さらに，「ザスーリチの手紙への回答の下書き」の〈第 2 草稿〉では，次のような文章がある。

「ここでは，多少とも理論的な問題はすべて度外視するとして，今日ロシアの共同体の存在そのものが，強力な利権屋たちの陰謀によっておびやかされているということを，あなたにいまさらいう必要はない。国家の仲介によって，農民の負担によって養われているある種の資本主義（capitalisme）が，共同体に相対峙している。この資本主義にとっては，共同体を押しつぶすことが利益なのである。さらに，多少とも生活にゆとりある農民を中

農階級に仕立てあげ，そして貧しい耕作者――すなわち大多数――をたんなる賃金労働者に転化することは，地主の利益なのである。」[26)]

ここでは，明確にフランス語原文においても「資本主義」(capitalisme) という言葉が使われている。

ところで，この「ヴェラ・ザスーリチ宛ての手紙」の下書きは〈第4草稿〉まで書かれたが，〈第3草稿〉と〈第4草稿〉には「資本主義」(capitalisme) という用語は使われていない。そして，最終的に出された手紙の本文はかなり簡潔な文章となっており，しかも，その手紙にも「資本主義」という言葉は使われていない[27)]。そこで使われているのは，「資本家的生産」(la production capitaliste) であり，それに似た用語としては『資本論』からの引用文における「資本家的制度」(du systèm capitaliste) のみである。

3. エンゲルスの使用例

なお，エンゲルスも，次の個所で，若干ながら「資本主義」という言葉を使っている。だが，それは，いずれもマルクス死後の1890年代においてである。

① 『イギリスにおける労働者階級の状態』「1892年ドイツ語版への序文」(ドイツ語)，『マルエン全集』第2巻，668ページ。*MEW*-2, S. 640.

② 『共産党宣言』「イタリア語序文」(フランス語)，1893年2月1日，『マルエン全集』第4巻，607ページ。*MEW*-4, S. 590.

③ 「ダニエリソーン宛ての手紙」(英語) 2回使用，1893年2月24日，『マルエン全集』第39巻，35ページ。*MEW*-39, S. 37.

④ 「ダニエリソーン宛ての手紙」(英語) 4回使用，1893年10月17日，『マルエン全集』第39巻，135，137ページ。*MEW*-39, S. 148, 150.

⑤ 『ロシアの社会状態』「あとがき」(ドイツ語) 2回使用，1894年，『マル

エン全集』第 18 巻，682，690 ページ。*MEW*-18, S. 667, 674.

4. 小　括

ともあれ，これまでみてきた「資本主義」という用語についてのマルクスの使用例を考慮に入れたとしても，そこから，マルクスに「資本主義」という用語と概念が独自的なものとしてあったとみることはできない。

その理由としては，なによりもまず，マルクスはその生存中に公刊した著書や論文においては，「資本主義」（Kapitalismus, capitalism, capitalisme）という用語をまったく使っていないということである。

さらに，未定稿の原稿やノート類あるいは手紙においても「資本主義」という用語の使用はきわめて稀なものでしかなく，しかも，走り書き的な省略的な書き方にすぎないものであったり，あるいは，手紙類においても，「資本主義」という言葉の使用は英語やフランス語での文章のなかにおいてであって，マルクスの本来的な使用言語であるドイツ語ではシェフレの書名にかんするもの以外にはまったく使われていないのである。

そのように，これまでみてきたマルクスが稀に使っている「資本主義 Kapitalismus」という用語は，次稿でみるような資本主義概念の確定にもとづく「市民的生産様式 bürgerliche Produktionsweise」といった新しい用語の使用や，あるいは，新しい用語表現への模索をへての「資本家的生産様式 kapitalistische Produktionsweise」という用語の確定とその後のゆるぎなき使用の場合のように，十分に熟考したうえでの新しい概念の確定や用語法がおこなわれているものとは考えられないものである。

したがって，パッソウの指摘しているように，マルクスには「資本主義」という用語と概念は基本的には存在しておらず，マルクスにおいては資本主義範疇は「資本家的生産様式」という表現用語によってしめされているものである，と断定していいであろう。

III. わが国の論者による指摘

ところで，マルクスには基本的には「資本主義」という用語は存在しておらず，マルクスの資本主義範疇は「資本家的生産様式」という用語でもってしめされていたものであるというパッソウの指摘は，わが国においても，戦前以来，多くの論者によって指摘されてきたところである。

(1) 福田徳三「資本増殖の理法と資本主義の崩壊」(1921年)

そのもっとも早いものとしては，マルクス批判家としての福田徳三氏が，『改造』の1921年10月号に「資本増殖の理法と資本主義の崩壊」と題した論文を掲載され，そのなかで次のように指摘されている。

「いったい「資本主義」という語は，今日はなはだ広く用いられているが，そもそも「資本主義」とは何を指していうかは，「階級」「階級闘争」もしくは「ブルジョアジー」，「プロレタリア」等の語におけると同じように，はなはだ支離滅裂な見解がおこなわれている。……「資本主義」という語は，かならずしも久しく用いられていたものではない。「資本制生産」kapitalistische Produktionという語は，強いて文献的に詮索していえば，1805年刊行の『経済学』という書において，ドイツの学者ゾーデンが使用している。……ところが，「資本主義」Capitalismという字〔ママ〕を用いたのは，おそらく，フランスの社会主義者ルイ・ブランがもっとも早い一人であろう。すなわち彼はその有名な『労働の組織』中に，バスチアを冷評した一節にこの語を用いている。……ブランの意味する「資本主義」なるものは，資本を壟断すること，資本の仇敵，黄金を産む鶏（資本）の絞殺者の謂であって，今日一般の用法とは，むしろまったく正反対のものであり，また

ゾーデンがいう資本制とは著しく異なっているのである。すなわちマルクス以前においては，「資本制生産」「資本主義」の語は，はなはだ稀に，そして確定した意義なしに使用せられていたにすぎない。否，マルクスにいたっても「資本主義」なる語は，まったく用いていないのである。カウツキー編集の『資本論』第1巻の大衆版の事項索引ははなはだ良くできているものであるが，その中に「資本主義」「資本制生産様式」と複標語を載せて，該当個所が挙げてあるが，そのいずれの部分を引照してみても「資本主義」という語はこれを見いだすことはできない。「資本制生産」の語のみを見るのである。カウツキーが「資本主義」を「資本制生産様式」と複標語としたのは，両者を同義語として取り扱ってさしつかえないものと認めたからであろう。」[28)]

この論文について，小泉信三氏は，雑誌『我等』の1922年新年号の「最新学説の紹介」のなかで，1921年度の「経済学界における最大の収穫の一つ」として激賞されている。

しかも，この論文は，河上肇氏とのあいだのいわゆる福田・河上論争の発端となった論文であって，この福田論文にたいして，河上肇氏は，雑誌『我等』4巻3号（1922年3月）に「福田博士の「資本増殖の理法と資本主義の崩壊」に就いて」という論文を書いて，反論されている。だが，そこでの河上肇氏の批判においては，「資本主義」語にかんする論点については取りあげておらず，論争の対象とはなっていない。

なお，ここで福田徳三氏が「資本主義」や「資本制生産」といった用語について指摘されている内容は，その3年ほど前の1918年に出版されたパッソウの『資本主義――概念的・術語的研究――』にほぼ全面的に依っているものである。

ともあれ，このように，すでに1921年（大正10年）時点において，わが国においても，マルクスには「資本主義」という用語は使われていなかった

ということは，明示的に紹介されているのである。

(2) 我妻栄「資本主義生産組織における所有権の作用」(1927年)

ついで，民法学者の我妻栄氏が，1927年に，『法学協会雑誌』に掲載された「資本主義生産組織における所有権の作用――資本主義と私法の研究への一寄与としてのカルネルの所論――」なる論文において，現代社会の経済組織と私法との関連について問題にするにあたって，「資本主義」「資本主義的」なる語について次のようにいわれている。

「私の資本主義と私法というのは，要するに，現代の経済組織と私法という意味であるが，現代の経済組織を「資本主義的」ということが，果たして当たれるものであるかどうかは，経済学の学徒ならざる私には，確信を以て答えることは出来ない。

この点に関するパッソウの詳細な研究によれば，事情は次のごとくである。……「資本主義」"Kapitalismus" という語は，比較的新しい言葉であって，マルクスの用いた "Kapital" "kapitalistische Produktionsweise" というような言葉は，これにたいする大なる刺激とはなったけれども，マルクスの『資本論』中には "Kapitalismus" という語はついに一度も出てこない。そして，ゾンバルトの大著『近代資本主義論』以来，「資本主義」という語は，すべての社会科学者のあいだに一種の流行とも称すべきに至ったけれども，その内容の確たる定義に至っては，いまだ何人によっても与えられていない。そして，パッソウはいう。「資本主義」という語は，これによって，経済学者が従来用いてきた「資本」という観念とは遠く離れた事柄を意味せんとするものであり，殊に，意識的または無意識的に，一種の価値判断をともなった意味に用いられる場合が多いから，科学的研究にはまったく不適当な概念である，と。

思うに，「資本主義」という言葉の用いられた場合には，従来パッソウ

のいうような欠点があったことは事実であるかもしれない。しかし，……今日においては，ゾンバルトのいうように，むしろ，「資本主義」という言葉を以て現代経済組織の特質を表現する純客観的な科学的概念として予定し，進んで，その内容を明らかにすることに努力することが賢明な道であろうと考えられる。」[29)]

(3) 平瀬巳之吉『古典経済学の解体と発展』(1950年)

ところで，戦後においては，平瀬巳之吉氏が，古典派経済学の解体をともなうマルクス経済学の確立との関連においてロォドベルトゥスの経済学の吟味を経済学説史研究としておこなわれるなかで，1950年に出版された『古典経済学の解体と発展――ロォドベルトゥス批判――』において，ロォドベルトゥスが1870年代以降の書簡のなかで使っている「資本主義」という言葉に関連して，次のような指摘をおこなっておられる。

「元来が資本主義という言葉は，リヒアルト・パッソウの考証によれば，ルイ・ブランに起源しマルクスによって普及せしめられたもので，そのかぎり対象世界の客観的認識というよりは，むしろそれの批判ないし価値判断をふくむと考えられている。……

ともあれ資本の問題は，19世紀中葉，社会主義者たちの関心をとらえ，経済学の問題点を形成しはじめる。さればロォドベルトゥスはいう，「資本の謎がとかれぬうちは，社会問題とひとのよぶ現代のスフィンクスは断崖に身を投ずることはないであろう。」あたかもマルクス『資本論』第1版の公刊と同じ1867年のことである。この頃ロォドベルトゥスはすでにその後20年間を筐底に蔵したまま，1875年のその死にいたるまでたえず加筆訂正を怠らなかった遺稿『資本』の草稿をほぼ完了していた。まさに歴史社会的環境の所産としてうみ出されたところの，マルクスとロォドベルトゥスと，この2つの『資本論』。それはしかし古典学派からの必然的

な発展の子として相互に牽引しつつ，それにしてはまた本質的な点であまりにも相互に反発しあう二人の『資本論』であった。……

ただしロォドベルトゥスは，みずから看破したはずの本体を語るのに，「資本主義」という言葉をあまり使わない。ことに本格的な諸著作ではそうで，ただ時に1870年代以降の書簡のなかで，……総じて文学的表現でのみこれを使い，フランス社会主義の思想的影響を多分にうけたはずの彼としては，不思議な位にこの術語を使わない。その代わりに彼が全著作を通じて愛唱する表現といっては，「自由放任の交換」ということであった。

……もとよりルイ・ブランの「資本主義」という術語があらわれるのは，1839–40年にわたって彼が“Revue du progrés politique, social et littéraire”に書き，のち“*Organisation du travail*, 1840”としてまとめられた激情的で影響力の強い著作においてであったが，この頃にはロォドベルトゥスはすでに「自由放任の交換」という術語を確立していたわけである。そして「資本主義」という術語が，パッソウのいうようにマルクスの影響力に結びついて普及させられたのち，1870年代にはついにロォドベルトゥスもたとえ文学的表現としてにせよ，これを使わぬわけにはいかぬほどの事情となってくるのである。」[30]

平瀬氏は，ルイ・ブランが「資本主義」という術語を初めて使ったのは，1839–40年の“*Revue du progrés*”誌に掲載され，それが1840年にまとめられて『労働組織 *Organisation du travail*』として出版された書物においてであったと指摘されているのであるが，しかし，すでに拙稿「ルイ・ブランと「資本主義」――「資本主義」語のはじまり（1）――」[31]において明らかにしてきたように，『労働組織』の初版（1840年）においては「資本主義」なる用語は使われてはいない。

ルイ・ブランが初めて「資本主義」という用語を使ったのは，1850年に大幅な改訂増補をおこなって出版した第9版の『労働組織』においてであって，

それもあらたに追加的に組み入れた「第4編　信用」なる編の叙述において「資本主義」なる言葉は使われているのである。

（4）　大塚久雄『欧洲経済史』（1956年）

大塚久雄氏は，欧州経済史の入門的な概説書として書かれた『欧洲経済史』（1956年）において，次のようにいわれている。

「経済史学のうえで「資本主義の発達」などというばあい，「資本主義」Kapitalismus, capitalism, capitalisme とは，いったいどのような事実を意味しているのであろうか。あるいは，意味せしめるべきなのであろうか。この点に関しては研究史上いろいろの立場があり，したがってもちろんいろいろな用語法がみられる。しかし，ここでは，近代の西ヨーロッパの諸国やアメリカ合衆国などで世界史上もっとも純粋に近い姿をとって現れてきたような，近代に独自な生産様式という意味に用いることにしようと思う。そのばあい，生産様式という語はさしあたって歴史の一定の段階に照応した，経済生活（生産 ⇄ 消費）の根本的な社会的組み立てというほどに解しておきたい。」[32)]

そのように「資本主義」という用語の意味内容について述べたうえで，大塚氏は，さらに，それにたいする注のなかで次のように指摘されている。

「このような意味での「資本主義」は，いうまでもなく，カール・マルクスの『資本論』における当面の研究対象であった。けれども，今日でこそ，マルクス主義経済学においても「資本主義」は術語として一般に使用されるようになっているが，『資本論』においては「資本主義」という用語はまだ使用されてはいない。ちなみに，「資本主義」が今日のような普及をみるにいたるきっかけをつくったのは，おそらく「近代資本主義」の表題をもつ

ヴェルナー・ゾンバルトの大著，Werner Sombart, *Der moderne Kapitalismus*, 1. Aufl., 2 Bde., 1898; 2. vermehrte Aufl., 3 Bde. (jeder 2 Halbbände), 1916 であったと思われる。」[33)]

(5) 高島善哉『アダム・スミス』(1968 年)

ところで，高島善哉氏は，1968 年に岩波新書によるアダム・スミスの概説書として出された『アダム・スミス』のなかで，マルクスは「資本主義」という用語を使っていないということについて，次のように述べられている。

「マルクスはいったいどこで資本主義体制という用語を使っているのか，……。たしかにマルクスは，彼の著書や論文のどこにおいてもそういう用語を使ったことはない。こういってまず間違いはないと信ずる。資本主義体制はおろか，資本主義という用語もマルクスの著作には見当たらない。1859 年の『経済学批判』や 1867 年の『資本論』においては，資本主義というべきところで，マルクスは資本主義的生産様式という言葉を使っている。してみると，まだマルクス以前には資本主義という言葉もなかったか，あるいはあってもほとんど使われていなかったと思われるのである。そしてマルクスが，この 2 つの著作の中で資本主義的生産様式の分析を行ない，とくに資本というものの重要さに人びとの注意を喚起するようになってから，この資本主義という言葉がしだいに学界に根を下ろしてきたように思われるのである。」[34)]

この高島善哉氏の指摘のなかには，不正確なところが 2 点ある。

その 1 点は「資本主義体制」という用語についてである。高島氏は，「マルクスはいったいどこで資本主義体制という用語を使っているのか，……彼の著書や論文のどこにおいてもそういう用語を使ったことはない」といわれているのであるが，訳語が「資本主義体制」とされている用語は kapitalistische

System と kapitalistische Regime との 2 つがあり，マルクスはどちらも使用している。

『資本論』についてみても，たとえば，「労働の価格の上昇は，やはり，ある限界のなかに，すなわち資本主義体制（kapitalistische System）の基礎をたんにゆるがさないだけではなく，増大する規模でのこの体制の再生産を保証するような限界のなかに，閉じこめられているのである」[35]とか，あるいは，「この集中，すなわち少数の資本家による多数の資本家の収奪と手を携えて，……世界市場の網のなかへの世界各国民の組入れが発展し，したがってまた資本主義体制（kapitalistische Regime）の国際的性格が発展する」[36]といった叙述がおこなわれていて，瞥見したところ，kapitalistische System は『資本論』第 1 巻に 6 回，第 2 巻に 1 回，第 3 巻に 8 回，合計 15 回使われており，kapitalistische Regime は第 1 巻に 1 回だけだが使われている。

2 つめの不十分な点としては，高島氏は「1859 年の『経済学批判』や 1867 年の『資本論』においては，資本主義というべきところで，マルクスは資本主義的生産様式という言葉を使っている」といわれているのであるが，マルクスが「資本主義的生産様式 kapitalistische Produktionsweise」という言葉を使いはじめたのは，1859 年 1 月に『経済学批判』を書き終わって後のことであって，『経済学批判』執筆時点においてはマルクスは「資本主義的生産様式」という用語はもちあわせておらず，この時期にマルクスが使っていた「資本主義」用語は「市民的生産様式 bürgerliche Produktionsweise」である。

だからこそ，かの有名な唯物史観の定式を叙述した『経済学批判』の「序言」においても，人類社会における歴史的形態の移りかわりの基礎としての生産様式の変遷についての指摘にあたって，「大づかみにいって，アジア的，古代的，封建的および近代市民的（ブルジョア的）生産様式が経済的社会構成のあいつぐ諸時期として表示されうる」[37]と，「近代市民的（ブルジョア的）生産様式 moderne bürgerliche Produktionsweise」という表現がおこなわれているのであって，「資本主義的生産様式 kapitalistische Produktionsweise」

という用語は使われていないのである。

なお，『経済学批判』の本文の原稿は1859年1月21日に完成し，その「序文」は1859年1月の日付けをつけて2月23日に出版者宛てに発送されたものである。

そして，マルクスが「資本主義的生産様式 kapitalistische Produktionsweise」という用語を使うようになったのは，その後の『経済学批判』の第2分冊としての《資本にかんする章》を執筆する準備のための「資本にかんする章へのプラン草案」や「わたし自身のノート〔『経済学批判要綱』〕にかんする摘録」の作成の過程においてであって，この時期のマルクスの諸資料の執筆順序と時期については種々論議のあるところであるが，1859年夏から1861年夏過ぎ頃の時期と推定されているところである[38]。

(6) 望月清司『マルクス歴史理論の研究』(1973年)

ところで，市民社会論的観点からマルクスの歴史理論に取り組まれた望月清司氏の『マルクス歴史理論の研究』(岩波書店，1973年)は，マルクスにおける「資本主義」という用語の使用あるいは非使用についての詳細な文献的検証もおこなわれているのであるが，そこでは次のような指摘がなされている。

「「資本主義」とはマルクスにとって何であったのか。ここで注意深い読者は，これまでの本書の表記において資本主義という用語をカッコ付きで用いてきたことに気づいたにちがいない。なぜか。それはわがマルクス自身が，あのぼう大な労作群において，それもとくに理論を展開する文章において，「資本主義」(der Kapitalismus) という言葉を用いたことがないからである。「資本家」(der Kapitalist) という語は周知のように無数に用いられるが，「資本主義」はパッソウの有名な指摘以後に公けにされた論稿をふくめて少なくともドイツ語形ではまったく――管見のかぎり『資本論』全3

巻中のただ1語だけを別として――用いられていない。「資本主義（カピタリスムス）」という概念がマルクスにない以上，厳密にいえば「資本主義的」という概念も成立しえないはずであり，したがって通常「資本主義的」ないしは「資本制(的)」と訳されている“kapitalistisch”は，もっとも正確には「資本家的」でなければならないであろう。それではまた戦前の高畠訳『資本論』（改造社版）にもどっただけではないか，それにたとえ「資本主義」という用語をマルクスが使わなかったとしても，その後のマルクス主義世界では日常語としてすでに定着しているのだから右は訳語上の問題でしかないのではないか，という反論がおそらく生ずるであろう。だがその反論には根拠がない。」[39)]

(7)　**馬場啓之助『資本主義の逆説』**（1974年）

さらに，経済思想やマーシャルの翻訳などで名を知られている馬場啓之助氏は，『資本主義の逆説』（東洋経済新報社，1974年）において，次のようにいわれている。

「「資本主義」という用語をわたしは使ってきましたが，この用語は社会主義者が使いはじめたもので，ドイツの歴史学派の人々がこの用語に定義をあたえ，古典経済学を批判する見地からこれを活用しました。つまり，資本主義という概念は，初めから社会主義との対概念として思想史に登場してきたのです。意外と思われるかもしれないが，古典派経済学者は，アダム・スミスにしても，ダヴィッド・リカードにしても，ジョン・スチュアート・ミルにしても，資本主義という用語を使っていません。新古典派経済学になっても，アルフレッド・マーシャルなどはまだこの用語を使っていないのです。かれらの著書のなかでは，資本主義という用語は現われてきません。いまなら当然資本主義というべきところに，「自由競争」とか「私有財産制」とかという用語を使っています。／資本主義に相当する

用語が使われはじめたのは，カール・マルクスによってでしょう。マルクスの「資本制生産様式」というのが，それであります。資本主義という用語に定義をあたえたのは，ドイツ歴史学派のウェルナー・ゾンバルトです。かれはその画期的な大著『近代資本主義』（1902～27年）において，資本主義という概念に初めて定義をあたえました。……新古典派経済学者も，マーシャルは使いませんでしたが，ケインズになると，『自由放任の終焉』（1926年）をよい例とするように，資本主義という用語を使いだしています。」[40)]

なお，ここで馬場啓之助氏は「資本主義という概念は，初めから社会主義との対概念として思想史に登場してきたのです」といわれている。

たしかに，20世紀においては，世界中の国々が社会体制のあり方について資本主義か社会主義かという二者択一的な選択をせまられるという状況にあったし，また，第2次世界大戦後においては資本主義体制と社会主義体制という2つの世界体制の冷戦的対立が世界の基本構造になるという事態もあって，資本主義と社会主義とは一対をなす体制的存在であり，対概念をなすものであると理解されても当然のように思われるかもしれない。

しかしながら，「資本主義という概念は，初めから社会主義との対概念として思想史に登場してきた」という指摘はいささか不正確である。

というのは，思想史的にみて，「資本主義」という用語の登場は，たしかにピエール・ルルーやルイ・ブランといったフランスの初期社会主義者たちによって使われはじめたものであるが，その使われ方は，その意味内容としては「資本」や「資本家」と同じ概念であったり，あるいは「資本」の排他的占有という資本所有の特有の事態を表現する用語として使われたものであって，「資本主義」という用語はけっして社会主義体制にたいする社会システムのあり方を意味する概念をしめすものではなかったのである。

さらにいえば，マルクスの場合においても，マルクス的用語である「資本

家的生産様式」という用語は，人間社会の歴史的変遷におけるアジア的，古典古代的，中世封建的な生産様式の諸形態といった歴史的諸形態の1つとしての近代社会特有の「生産様式」の形態をしめすものとして作られ，使われた用語に他ならぬものであって，けっしてたんなる「社会主義的生産様式」との対概念をなすものとして生みだされ，使われたものではない。

(8) 小　括

ともかく，これまでみてきたように，マルクスには基本的に「資本主義」という用語は存在しておらず，マルクスの資本主義概念は「資本家的生産様式」という用語によって表現されているのであるということは，パッソウによって明らかにされた1918年以来，国内外のきわめて多様な分野のさまざまな論者によって指摘されてきたところである。

それにもかかわらず，マルクスの資本主義範疇が「資本家的生産様式」という用語と概念によってうち立てられているという事実に留意したマルクス理解は意外に少なく，マルクスの使っていない「資本主義」という用語に恣意的な意味をもたせながらの『資本論』解釈と近代社会の経済構造把握が横行しているのが一般的現状である。

〔注〕

1) Richard Passow, *"Kapitalismus" Eine begrifflich-terminoligische Studie*, Jena, 1918, S. 2–3.
2) カール・マルクス『資本論』第1巻，『マルクス＝エンゲルス全集』第23巻a，47ページ。*MEW*-23a, S. 49.
3) 同上，『マルエン全集』第23巻b，995ページ。*MEW*-23b, S. 791.
4) 同上，第3巻，『マルエン全集』第25巻b，1130ページ。*MEW*-25b, S. 892.
5) Tom Bottmore, ed., *A Dictionary of Marxist Thought,* 2nd ed., Oxford, 1997, p. 72.
6) 望月清司『マルクス歴史理論の研究』（岩波書店，1973年）27ページ。
7) 望月氏は，エンゲルスによる『共産党宣言』イタリア語版序文（原文フランス語）における「資本主義」語を「マルクス在世中」とされているが，この「イタリア語版序文」は1893年2月1日付けのものであって，マルクス死亡後のものである。

8) *Karl Marx / Friedrich Engels Gesamtausgabe*（新 *MEGA*), II-3.3, S. 1114. 資本論草稿集翻訳委員会訳『マルクス資本論草稿集』⑥（大月書店，1981 年）692 ページ。

9) この点については，服部文男氏から私信によって教示されたところであって，服部氏は「これに続く動詞からみて単数の名詞と考えられることから編集者が「資本主義」と解読したものと思われ，私もそれ以外の名詞は思い浮かびません」とみなされている。このようなマルクスの「資本主義」語についての新 *MEGA* における写真版の存在とその解読についての服部氏のご教示については，心からの謝意を表したい。

10) *MEW*, 26-2, S. 493.『剰余価値学説史』II,『マルエン全集』第 26 巻 - II，665 ページ。

11) 新 *MEGA*, II-3.3, S. 1114. 資本論草稿集翻訳委員会訳『マルクス資本論草稿集』⑥（大月書店，1981 年）692 ページ。

12) Karl Marx, *Ökonomische Manuskripte 1863–1867*, 新 *MEGA*, II-4.1, S. 358.

13) *Ibid.*, S. 361.

14) *Ibid.*, S. 358.

15)『資本論』第 2 巻,『マルエン全集』第 24 巻，143 ページ。*MEW*-24, S. 120.

16) 同上,「第 2 版序文」31 ページ。*MEW*-24, S. 28.

17)『資本論』第 2 巻『マルエン全集』第 24 巻，147 ページ。*MEW*-24, S. 123.

18) A.E.F. Schäffle, *Kapitalismus und Socialismus mit besonderer Rücksicht auf Geschäfts- und Vermögensformen: Vorträge zur Versöhnung der Gegensäze von Lohnarbeit und Kapital*, Tübingen, 1870.

19)「マルクスからエンゲルス（在マンチェスター）へ」（1870 年 9 月 10 日）『マルエン全集』第 33 巻，54 ページ。*MEW*-33, S. 60.

20)「エンゲルスからマルクス（在ロンドン）へ」（1870 年 9 月 13 日）『マルエン全集』第 33 巻，56 ページ。*MEW*-33, S. 62.

21)「アードルフ・ヴァーグナー著『経済学教科書』への傍注」『マルエン全集』第 19 巻，359 ページ。*MEW*-19, S. 360.

22) マルクス「『オテーチェストヴェンヌイエ・ザピスキ』編集部への手紙」『マルエン全集』第 19 巻，116–117 ページ。*MEW*-19, S. 110–111.

23)「マルクスからダニエリソーン（在ペテルブルグ）宛ての手紙」（1879 年 4 月 10 日）『マルエン全集』第 34 巻，299–300 ページ。*MEW*-34, S. 373.

24) マルクス「ヴェ・イ・ザスーリチの手紙への回答の下書き」〔第 1 草稿〕『マルエン全集』第 19 巻，394–395 ページ。*MEW*-19, S. 392.

25) D. Rjazanov, *Marx-Engels Archiv*, 1. Band, Verlag Sauer & Auvermann KG, Frankfurt a. M., 1969, S. 326.

26） 同上，〔第 2 草稿〕『マルエン全集』第 19 巻，403 ページ。D. Rjazanov, *Marx–Engels Archiv*, 1. Bd., S. 334. *MEW*-19, S. 400.

27） マルクス「ヴェ・イ・ザスーリチへの手紙」（1881 年 3 月 8 日付け）『マルエン全集』第 19 巻，238–239 ページ。*Marx-Engels Archiv*, 1. Bd., S. 341–342. *MEW*-19, S. 242–243.

28） 福田徳三「資本増殖の理法と資本主義の崩壊（その 1）」『改造』1921 年 10 月号，17–19 ページ。なお，引用にあたって表現を分かりやすく変えたところがある。なお，本論文の存在については深沢竜人氏（元・明治大学(院)）により教示された。ここに記して謝意を表したい。

29） 我妻栄「資本主義生産組織における所有権の作用――資本主義と私法の研究への一寄与としてのカルネルの所論――」『法学協会雑誌』第 45 巻第 3・4・5 号，1927 年。同『近代法における債権の優越的地位』有斐閣，1953 年，342–343 ページ。

30） 平瀬巳之吉『古典経済学の解体と発展――ロォドベルトゥス批判――』日本評論社，1950 年，199–201 ページ。

31） 重田澄男「ルイ・ブランと「資本主義」――「資本主義」語のはじまり（1）――」『岐阜経済大学論集』第 33 巻第 2 号，1999 年 9 月，11–13 ページ。

32） 大塚久雄『欧洲経済史』（弘文堂，1956 年）3 ページ。

33） 同上，4 ページ。

34） 高島善哉『アダム・スミス』（岩波新書，1968 年）165–166 ページ。

35） マルクス『資本論』第 1 巻，『マルエン全集』第 23 巻 b，810 ページ。*MEW*-23, S. 640.

36） 同上，995 ページ。*MEW*-23, S. 790.

37） マルクス「『経済学批判』序言」『マルエン全集』第 13 巻，7 ページ。*MEW*-13, S. 9.

38） 重田澄男『資本主義の発見』改訂版（御茶の水書房，1992 年）273–281 ページ，および，同「中期マルクスと資本主義範疇」浜林正夫・西岡幸泰・相沢与一・金田重喜編『経済学と階級』（梓出版社，1987 年）を参照されたい。

39） 望月清司『マルクス歴史理論の研究』（岩波書店，1973 年）22–23 ページ。

40） 馬場啓之助『資本主義の逆説』（東洋経済新報社，1974 年）47–48 ページ。